

本協議会でのこれまでの主なご意見

○ 薬剤師確保の必要性について

- 製薬企業では、製造業者の製造管理者と、製造販売業者の総括製造販売責任者に薬剤師が必要。後継者の育成や引退も踏まえ、長期的に安定して製造を続けるには、一定人数の薬剤師を確保する必要がある。
- 製造管理者・総括製造販売責任者は、諸問題に対して指導・補助する立場。新卒者がすぐになれるものではなく、分析・製造・対外関係などを網羅した人間でなければならない。
- 病院では、医師の働き方改革により、医師から薬剤師などの他職種へのタスクシフトが進んでいる。外部からは薬剤師の病院での役割が見えづらく、不足状況の緊急性が伝わっていないことが課題。
- 病院は薬剤師が確保できず本当に困っている。診療報酬上で、病棟に薬剤師を配置して服薬指導を行う場合の評価があるが、県内の公的病院でも実施できているところは一部のみ。
- 薬局は一般的に志望者が多いものの、富山県ではここ数年、ドラッグストアの進出が多くなっている傾向もあり、薬剤師会のアンケートでは、募集しても来ないという状況がある。
- 外来調剤は、おそらく既に需要のピークが来ているが、今後は在宅にシフトしていく。1薬局あたり平均2名程度の人員状況で、在宅に出られるかが課題になる。

○ 地域卒生の従事先の選択について

- コース選択は本人の希望によるため、想定人数が少ない製薬企業コースはゼロということもあり得る。
- 6年制薬学部になってから、薬剤師の従事先としては、実習で体験する病院・薬局のイメージが強い。製薬企業にも目を向けてもらえるよう、大学での教育をぜひ考えてほしい。
- 地域卒の入口の段階で、出口戦略としてのビジョン、どのような薬剤師を輩出したいか、卒業後はどのような世界が広がっているかを学生に明確に示すことが重要。学生のイメージとのミスマッチが懸念。

○ 各コースにおけるキャリアについて

- 地域医療コースは、薬剤師の育成という側面が強く打ち出されている。薬局での研修派遣については、それなりの薬局を選ぶ必要があると認識。薬局の選定には、各地域の薬剤師と連携しながら薬剤師会として協力したい。
- 3つのコースのうち製薬企業や行政は就職先が明確だが、地域医療コースでは身分がどうなるのか分かりにくく、学生に説明しづらい。
- 各コースのキャリアのモデルを描いて説明できれば、学生も、より具体的に自分の人生設計や将来のイメージを持てるようになる。

○ 中高生が薬剤師を目指すことについて

- 今の高校生、中学生に、薬剤師を目指してもらうために、いかにその魅力を発揮できるかが課題。
- 人口当たりの薬学部在籍者数が富山県は全国最下位であることは本当に衝撃的な数字。高校生、親、あるいは進路指導の先生にとって、薬学部や薬剤師という職業、あるいは県内企業が、薬学を目指すことのモチベーションになる存在であるか。
- 中高生にとって、医師、看護師など、ほかの医療職種に比べて、どんな仕事をしているか、どんなモチベーションをもって仕事をしているか見づらい面もあって、目標にするのが難しいところもあるのではないか。

○ その他

- 病院薬剤師が不足する中では、業務の選択と集中が必要。非薬剤師の業務を拡大して対人業務にシフトすること、DX化・機械化による業務の効率化が重要である。
- 地域医療コースにおける病院への配置の調整については病院薬剤師会が担当する。小さな組織なので、ぜひ県からの支援をいただきたい。
- 薬剤師を何のために確保しようとしているか、患者さんや県民のため、つまりウェルビーイングであり、それにつながっていることを効果として見せていく必要がある。